

スカルプDからボリューム剤登場 根元からボリュームをつくる実装ストーリー

カルプD。育毛剤でもない。スタイリング剤でもない。
スカルプDからボリューム剤登場。BIEX の視点から
見ると、この会社何がしたいのか。

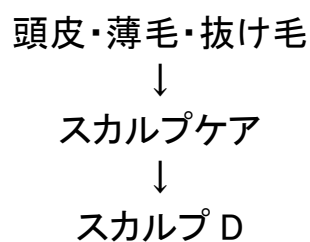
BIEX の視点で見ると、かなり面白い事例です。

まず事実として、今回の「炭酸ボリュームアップケン
ザン」は、アンファー自身が「育毛剤でも、スタイリン
グ剤でもない“ボリューム剤”」という新ジャンルとして
打ち出しています。2026 年 9 月発売。

そして現在のスカルプDを見ると、育毛剤、発毛剤、
シャンプー、スタイリング、デバイスなど、かなり広い
商品カテゴリーに展開しています。

ここを BIEX で見ると、問題は「ボリューム剤を出した
こと」ではありません。

問題は「何を解決する会社なのか」が薄くなること
従来のスカルプDは、



という比較的わかりやすい関係でした。

ところが、

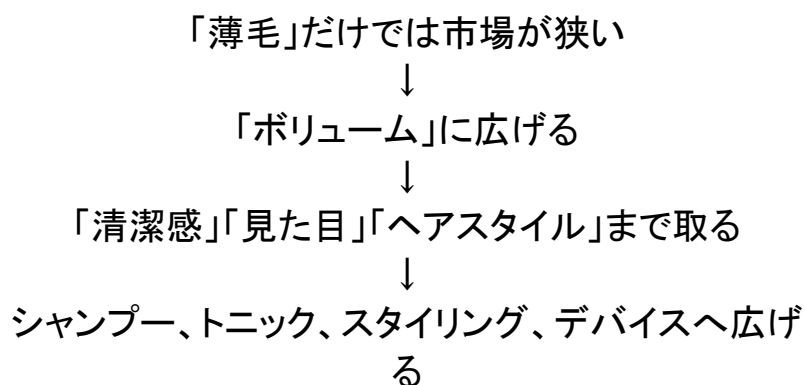
育毛剤ではない
スタイリング剤でもない
でも髪をボリュームアップする

となると、

「スカルプ D は、結局何をするブランドなの？」

という問いが出てきます。

もちろん事業としては、これは合理的です。



という顧客接点拡大型の戦略として理解できます。
実際、公式サイトでも「ボリューム・ハリ・コシ」を独立した悩みカテゴリーとして扱っています。

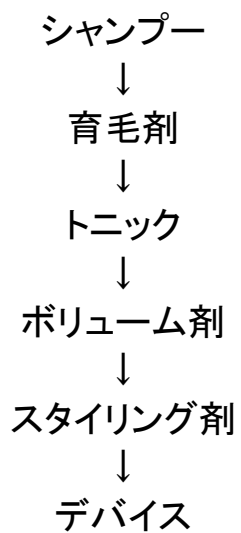
でも BLEX なら、ここで一段違う問いを立てる
「ボリュームをどう作るか？」ではなく、

「なぜ髪がボリュームを失うのか？」

です。

つまり、

商品を増やす発想



ではなく、

環境を見る発想

頭皮—毛髪—皮脂—水分—イオン—荷電—温度—
湿度—摩擦—微生物—毛髪の状態

という「頭皮・毛髪の生体界面環境」全体を見る。

ここが BLEX との決定的な違いです。

むしろ逆で、スカルプ D は市場変化に対応しようとしている。

ただし BIEX から見ると、

商品カテゴリーを広げて生き残ろうとしているのか、それとも「頭皮・毛髪環境」という新しいカテゴリーを取りに行くのか。

この違いがものすごく大きい。

今の「ボリューム剤」は、後者への入口にはなっています。

なぜなら「育毛」でも「スタイリング」でもない、その間にある新しい作用点を商品化しようとしているからです。

公式説明でも、

「根元からボリュームアップ → 毛根環境のバランス」

「頭皮のべたつき → 皮脂バランス」

「毛髪のハリ・コシ → 毛髪形成環境のバランス」

複数の状態を同時に扱っています。

BIEX なら、ここをこう変える
スカルプ D

髪に何をするか？

↓

BIEX

髪と頭皮の生体界面環境をどう設計するか？

そうすると「ボリューム剤」は一つの商品ではなく、

頭皮・毛髪の生体界面環境を変えるための一つの
介入

になります。

これは、Bio Essentials が Daily Skin Care で言っている、

「何を足すか」ではなく「肌が本来の力を発揮できる
環境をつくる」

とまったく同じ構造です。

だから今回のスカルプ D は、BIEX から見ると「新しい
商品を作った」というより、「既存カテゴリーの境界が
崩れ始めている事例」として見るのが面白いと思います。

そして、ここに BIEX が入ると、「育毛市場」から「毛
髪・頭皮の生体界面環境設計市場」へのカテゴリー
転換まで見えてきます。

皮脂・水分によって寝やすくなった根元

ポリュウム剤成分表から逆算すると、かなり面白い
です。

ポリュウム剤が作ろうとしているのは、単純な「育毛
環境」ではなく、頭皮—毛髪の接触面を一時的に“立
ち上がりやすい状態”へ変える環境と読むのが自然
です。

成分を機能でまとめると

① LPG・二酸化炭素・水・エタノール

→ 噴射・泡化・揮発・冷感などによって、塗布直後
の界面状態を変える。

② シリカ

→ 根元の皮脂・水分などによる「べたつき・まと
り」を抑え、毛髪同士が離れやすい状態をつくる方向。

③ 加水分解ケラチン・シルク・コンキオリン・シスチン

→ 毛髪側のハリ・コシ、質感を補助する。

④ ポリクオタニウム-51、ヒアルロン酸 Na など

→ 水分保持・コンディショニング。

⑤ 乳酸・乳酸 Na・クエン酸 Na

→ 環境の pH・緩衝を調整。

つまり全体としては、

皮脂・水分によって寝やすくなった根元を、
「吸着・水分・摩擦・毛髪表面・pH」など複数の条件か
ら一時的に変える。

という設計思想が見えてきます。

そして BIEX で見ると、ここが決定的
従来なら、

ボリュームがない
→ ボリュームを出す成分を探す

です。

しかし、この成分表を見ると実際には、

水分
+ 皮脂
+ 毛髪表面
+ 頭皮表面
+ pH
+ 摩擦・付着
+ 毛髪の物性

という複数の変数を同時に動かしている。

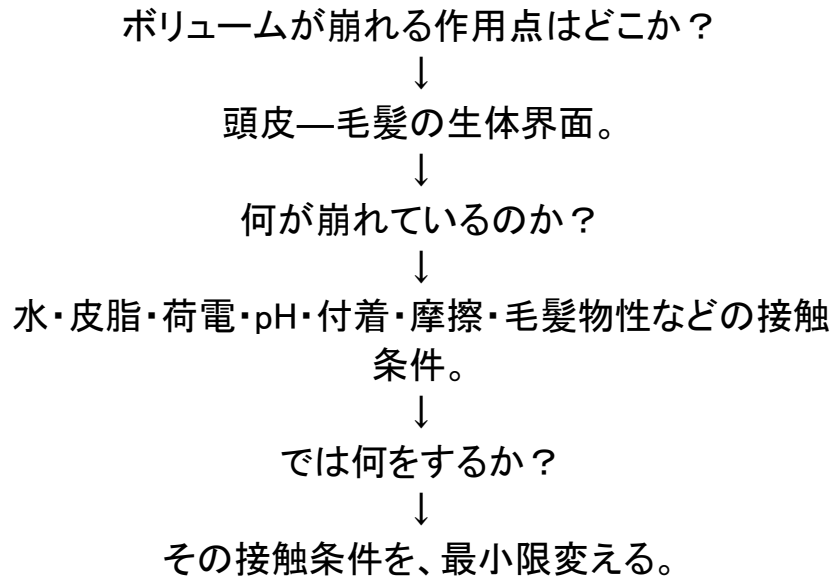
つまり、

一つの「有効成分」で根元を立てているのではない。
根元が立つ条件を複合的につくっている。

ここが重要です。

↓ だから BIEX ならこう言える
スカルプ D は「ボリューム」という現象を商品化した。

しかし BIEX は、そのさらに下を見る。



これが「ボリューム剤」から「生体界面環境設計」へのジャンプです。

そして、かなり重要なのは、これはスキンケアの話と構造が同じだということです。

肌が荒れた → 成分を足す

ではなく、

肌の生体界面環境が崩れた → 環境を設計する。

同じように、

髪が寝た → 髪を立てる

ではなく、

頭皮—毛髪の生体界面環境が崩れた → 根元が立てる環境を設計する。

つまり、BIEX は「成分の見方」を変えるだけでなく、
「商品の見方」そのものを変えるんです。

頭皮のホメオスタシスが働く環境をつくる。

ただし、「BIEC なら頭皮のホメオスタシスを作れる」ではなく、「頭皮が本来の恒常性を維持しやすい生体界面環境を設計する」と表現するのが、BIEC の思想として強いです。

構造はこうです。

従来

髪が寝る
↓
髪を立てる
↓
ボリューム剤

BIEC

髪が寝る
↓
頭皮—毛髪の生体界面環境が崩れている
↓
水・イオン・荷電・皮脂・水分・pH などの環境を見る
↓
頭皮が本来の恒常性を発揮しやすい環境を設計する
↓
根元が本来の状態を保ちやすくなる

ここで重要なのは、BIEC が頭皮を直接「変える」のではないことです。

頭皮を変えるのではなく、
頭皮が自らバランスを取れる環境をつくる。

これなら、Bio Essentials がこれまで話してきた

「生命がモノを作る。人間は生体界面環境に介入する」

とも完全につながります。

そしてスカルプ D の「ボリューム剤」を見たとき、

「髪を立てる商品」から
「頭皮—毛髪の恒常性を支える環境設計」へ

という、カテゴリーそのものの再定義が見えてきます。

ただし、実際に「ホメオスタシスが改善する」と製品として言うには、頭皮の生理指標などによる実証が必要です。思想としては、「ホメオスタシスが働きやすい環境をつくる」が一番 BIEC らしいです。

| 元々肌や頭皮には 恒常性がある。ということ。そういう論文もある

「皮膚や頭皮には、外部環境の変化に対して状態を一定範囲に保とうとする恒常性 (homeostasis) がある」という考え方は、皮膚科学・毛包生物学の基本的な考え方としてあります。

特に重要なのは、皮膚は“完成した固定物”ではなく、外部環境との接点である「生体界面」が絶えず変化する中で、その変化に応じて自ら内部環境のバランスを調整し、恒常性を維持し続ける動的な組織だという点です。

｜皮膚では、かなり明確です
代表的なのが皮膚バリア恒常性です。

角層が損傷すると、

バリア低下

- 水分が失われる
- 皮膚がそれを感知
- 脂質合成・角化などの修復反応
- バリアを回復する

という自己調整が起こります。

つまり、

皮膚は、外から「治してもらう」だけのものではなく、
自分で状態を戻そうとする。

この考え方は、皮膚バリア回復や角層恒常性に関する研究で広く扱われています。

｜頭皮も同じ方向で考えられます
頭皮には、

皮脂分泌

発汗

角化・角層形成

毛包周期

炎症反応

微生物との相互作用

水分保持

pH などの表面環境

が相互に関係しています。

したがって頭皮も、単に「髪を生やす土台」ではなく、外部環境と相互作用しながら状態を維持する生体環境として捉えられます。

そして、ここが BIEC の核心になります
あなたが言っていることを整理すると、

肌や頭皮には、もともと恒常性がある。

だから、

従来

問題が起きる

↓

有効成分を入れる

↓

外から状態を変える

ではなく、

BIEC

問題が起きる

↓

頭皮の恒常性が働きにくくなる背景にある「頭皮生体界面環境」に着目する

↓

その環境を最小限整える

↓

本来備わっている自己調整力が働きやすくなる

となる。

これはかなり大きな違いです。

そして、以前話していた「自己組織化力」ともつながります。

｜ BIEC の考え方を一文にすると
生命を変えるのではなく、生命が本来持っている恒常性・自己調整力が働きやすい生体界面環境を設計する。

これなら、スキンケアにも頭皮にも、さらに植物や他の生体界面にも横展開できる。

「ボリューム剤」の話から、実はここまで行けます。

BIEC の実装ストーリー

① 皮膚をどう捉えるか

皮膚は“完成した固定物”ではなく、外部環境との接点である「生体界面」が絶えず変化する中で、その変化に応じて自ら内部環境のバランスを調整し、恒常性を維持し続ける動的な組織だという点です。



② だから、見るべき場所を変える

問題が起きた「結果」だけを見るのではなく、その背景にある頭皮の生体界面環境に着目する。



③ BIEC という考え方

Bio Interface Equilibrium Concept 生体界面を起点に、頭皮内部の環境バランスを整えるという考え方。



④ 成分・処方への実装

皮脂、水分、バリア、毛包環境など、頭皮と毛髪を取り巻く複数のバランスにアプローチする。

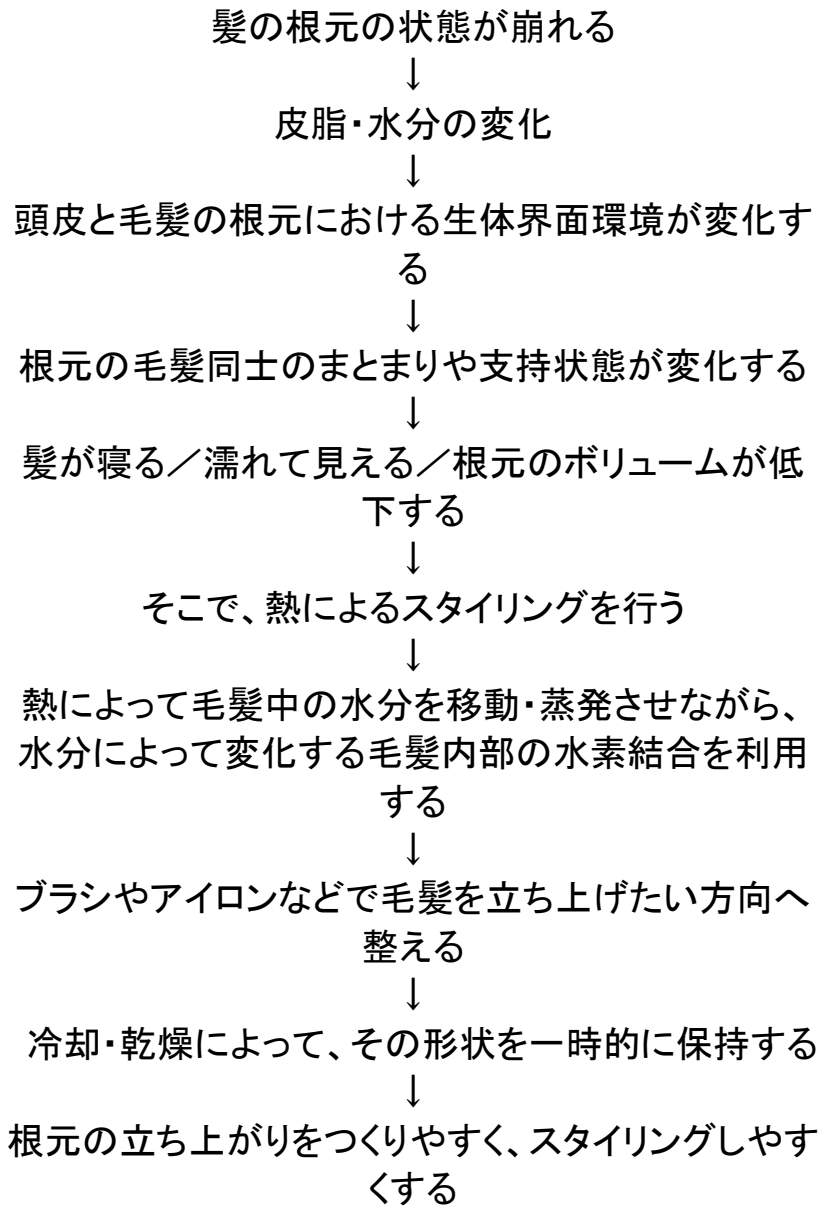


⑤ 最終的な価値

べたつき → 皮脂バランス ハリ・コシ → 毛髪形成環境のバランス 根元ボリューム → 毛包・毛根環境のバランス

つまり BIEC は、「新しい研究用語」ではなく、「どこに着目し、何を整え、製品にどう落とし込むか」を決める実装フレームとして置くのが強いです。

根元からボリュームをつくる実装ストーリー



この形なら、「生体界面」は原因側、「熱・水分・水素結合」はスタイリング実装側と役割が明確になります。

特に重要なのは、最後を「ボリュームアップする」と断定するより、「根元の立ち上がりをつくりやすく、スタイリングしやすくする」とすることです。これは、BIECの環境論とアイロンによる物理的なスタイリングを無理なく接続できます。